講演要旨
「音声言語の同時通訳における概念化のプロセス」

船山　仲他（神戸市外国語大学）

　どのような記号も「形式」と「意味」によって構成される。日本語や英語などの音声言語では聴覚によって識別される音素の組み合わせが「形式」として採用される。しかし、「形式」の輪郭がある程度はっきりしているのに対して、「形式」が表す「意味」の方は記述しにくい。辞書的な「意味」はその言語を使う人間集団によって契約的に定められているように見えるかもしれないが、実際のコミュニケーションは人の心と文脈によっても支えられていて、全ての「意味」が絶対的に確定しているわけではない。
同時通訳が可能なのは記号の変換が瞬時に可能だからではない。人間同士のコミュニケーションによって伝えられるメッセージを扱う送り手と受け手が人間であり、通訳者も人間であるから可能なのである。ここでは、そのようなメッセージを構成するものを「概念」と呼ぶ。「概念」は語彙的な「意味」のベースになるものと考えられるが、辞書の記述よりも抽象的である。たとえば“手”という記号形式によって脳内に引き起こされる概念は、“人間の体の一部”であるだけではなく、“手段・方法”であったり、“（働く）人”であったりする。つまり、通訳行為の対象は「概念」である。本講演では、同時通訳において、ひとつの言語で表現されたメッセージがどのように「概念」化され、そしてそれに基づきもうひとつの言語の「形式」がどのように生成されるのか、そのプロセスについて論じる。